教育改革

～ギャップイヤーの可能性～

現在、教育問題はより重大なものとなっている。その一つに近年注目されている就職についての問題が存在している。

大学に入っても勉強はせずにただ就職のテクニックを学ぶ。そんな大学の就職学校化の問題。また、たとえ就職できたとしてもすぐに離職してしまう人の増加。今、よりグローバルになってゆく現代社会で私たちはしっかりと教育について考えるべきなのである。

 **１．はじめに**

近年、東京大学の秋入学の実施がメディアに取り上げられている。じつはこの秋入学の影響で注目を集めているコトがある。それは「ギャップイヤー」である。

今回、私はこのギャップイヤーのもつ大きな可能性を中心に論じていく。

**２．ギャップイヤーとは**

ギャップイヤーまたはギャップタームと呼ばれているものが存在する。両者は本質的には同じものなので今回はギャップイヤーで統一する。

ではこれはいったいどのようなものなのだろうか？

ギャップイヤーとは高校卒業から大学入学までの期間または大学卒業から大学院入学までの期間のことであり、学生はこの期間を利用してボランティア、インターンシップ、海外留学などに挑戦することができる。

**３．ギャップイヤーの意義とは**

学生はこの期間を利用して様々な社会体験をすることで、目的ややりがいをもって勉学にあたることができるようになる。

ギャップイヤーが定着している英国を例に挙げると、ギャップイヤーを経験した学生はいわゆる5月病にならない、退学者が少なくなったというデータが存在する。

学生の学校生活以外の面でもギャップイヤーのメリットはある。たとえば社会問題となっている就職問題である。これは学生と企業のミスマッチによるところが大きい。大企業には募集定数を大幅に上回る募集が集まっているのに対して、中小企業は募集定数を割っているという現状がある。

もし、ギャップイヤー制度があれば学生は様々な社会体験を体験することができる。このことで学生は様々な企業に対する理解を深め、自分自身に対しても得意なことや苦手なことや得意なことを明確化できる。

**４．ギャップイヤーの現状**

秋入学が実現した場合、必然的にギャップイヤーが導入されることになる。しかし秋入学の話は進行中といえどもその導入にはまだまだ時間がかかりそうである。その一方で、私立大学などではギャップイヤーの先駆けともとらえることができるプログラムがある。たとえば国際系の学部に多い1年間の留学を必須とするプログラムやインターンや一般企業による授業を単位と認定するプログラムも数多くある。

**５．目指すべき教育**

では日本でも海外と同じようにギャップイヤーを導入すればよいのだろうか。私は日本が既存の物よりも優れたギャップイヤー制度を導入するべきだと考える。これから日本の現状を分析しながら新しいギャップイヤーの提言につなげる。

現在、日本の大学は悲惨な状態に陥っているところが多い。特に地方大学の現状は厳しく、赤字経営となっている大学が多い。その一方で大学数は増え続け、また有名大学への学生の集中が起きている。また、大学生の学習の質の低下の問題もある。特に文系の大学生の学習時間の少なさは問題視されていて、海外留学者の減少も課題である。

このような現状から今の大学の存在意義が問われている。

そこで私は新しいギャップイヤー、つまり高校から大学までの間に2年間のギャップイヤーの導入を提言する。

この2年間で学生はボランティアや海外留学、インターンなどを経験する。これによって学生は自分の本当にやりたいことや自分にあったことをハッケンすることができる。

また、この2年間の間で学生は大学に進学するかどうかを決定する。このことによって大学には本当に学習をしたい人のみが入学することになる。つまり大学の教育レベルの向上が達成されるのである。

**６．国の役割**

ギャップイヤーへの理解を呼びかける。

金銭的問題で等しく学生が機会を手にすることができるようにする。

さまざまな団体がギャップイヤーに参加・協賛できるようにプラットホームをつくる。

一つの大学ではなくすべての大学・高校卒業生が交流できることを目指す。